

日本庭園史と森蘊の業績

—毛越寺庭園の復元・整備を通して—

はじめに 奈良文化財研究所は2012年で創立60周年を迎えた。今後の研究所の歩みと研究のありようを考えるきっかけであると同時に、過去を振り返るきっかけでもあると思われる。本研究は、奈良文化財研究所が設立された1952年4月から、1967年3月までの15年間、当研究所の建造物研究室長として日本庭園史の研究の発展に尽力した森蘊（もり・おさむ、1905～1988）の業績を再評価することを目的とする。

日本庭園史において、森は重要な地位を占めている。はじめて一生をかけ、庭園史学という学問を追求した人である。森の研究は大きく分けて、三つの段階と手段があったといえる。奈良文化財研究所入所前は、古文書や絵図などの文献史料を中心に調べ、分析した。在職中は、現地の実測調査にもとづいて、平安時代から室町時代、江戸時代にわたって、日本庭園史を体系的に研究した。そして退官後は、発掘調査にもとづいて歴史的な庭の復元・整備もおこなった。

京都の法金剛院庭園や浄瑠璃寺庭園、奈良の円城寺庭園や旧大乘院庭園、和歌山の紅葉溪庭園、平泉の毛越寺庭園と観自在王院跡など、今では国の特別史跡、特別名勝に指定されたり、世界遺産に登録されたりしている各地の文化財の保護にも力を入れた。日本庭園史学の基盤を築いた人だと言っても過言ではない。

上記のような業績から、森は研究者として広く認知されているが、作庭家としての顔を知る人は決して多くない。実は、森自身にとっては、歴史の研究と庭園の設計は切り離せないものであった。1967年に出版された『体系農業百科典〈第7巻〉造園』の別紙に森は「設計のための庭園史研究」という題名で短い論文を発表しており、その中で「私の庭園史研究は、歴史のための歴史研究であるより、これからの庭園意匠の在り方を考える参考資料の収集と整理」¹⁾のためであったと書いている。

今まで、研究者としての偉大な業績の陰に隠れ、作庭家としての森は見落とされてきた。本稿では、森が指導した毛越寺庭園の遺水の復元・整備を分析しながら、研究者として、また作庭家としての森の業績を紹介したい。

指定された史跡や名勝の場合はできる限り、発掘の結果にしたがって厳密に復元するのが常例である。ただし、一度滅びたものを完全に元の形に戻すことは不可能である。特に庭の場合は、ほとんどが生命のある自然の素材を基に構成されており、常に変化することが前提である。だから、どの復元の事業においても、創作に似たようなところがある。そういう曖昧なところに指導者の意図と美的感覚が表れてくると思われる。そのようなことを念頭において、2011年6月に「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群—」として世界遺産に登録された毛越寺庭園の復元・整備について考察したい。とりわけ、発掘調査・整備報告書にもとづいて、森が指導した遺水の工事を分析してみたい。

森蘊と平泉 本題に入る前に森が平泉の庭園遺跡群に関わるようになったいきさつを簡単に紹介する。森の日本庭園史研究は主に二つの時期と様式を対象としている。一つ目は平安時代の寝殿造系庭園と浄土式庭園である。二つ目は江戸時代前期の桂離宮と修学院離宮という回遊式庭園である。しかし、時代と様式が変わっても、いずれも王朝趣味の庭であるということに一貫性がある。その中で、11世紀末に開花した奥州藤原氏の本拠地、平泉は特に印象的であったようだ。

森は昭和6年（1931）から、当時の東京帝国大学工学部建築学科の助教授であった藤島亥治郎による日本建築史の講義に通いはじめた。そこで初めて平泉の庭園と遺跡群の存在を知った。「この時期に、私の一生の方針は半ば決したと言ってよい。こんな素晴らしい遺跡が平泉にあるのなら、在来の日本庭園史で全然取り扱われていないこれらを含めて、平安時代を中心とした本格的な日本庭園史を自分の手で組み立ててみたいと思うようになった。」²⁾

藤島亥治郎（1899～2002）とは、岩手県出身の建築史家で、戦後から晩年まで平泉の遺跡を調査し、毛越寺などの発掘・復元・整備に携わった。大学時代に藤島の講義を受けた森は、「それ以来いろいろな面で先生のご指導を受けてきた」³⁾と述べている。実際に、藤島と森は早くから一緒に仕事をするようになった。

昭和7年（1932）・8年（1933）、森はまだ大学院生だったころに、藤島の個人的な邸宅の庭造りに携わった。その時に「庭木も私が選び、運び、そして植えることの手

伝いをしたものである」⁴⁾。これはもちろん学術的な仕事ではないが、二人の間の信頼関係を築く上での重要な経験となったと思われる。

1961年に藤島は平泉遺跡調査会の会長として『平泉・毛越寺と観自在王院の研究』⁵⁾を編集したが、その企画には森は参加しなかった。初めて、歴史的な研究を一緒にしたのは、森が奈良文化財研究所を退官した1967年のことである。平泉文化史館に毛越寺を復元した全景の模型を展示するというので、藤島は建築を、森は庭園を担当した。

それ以降、1970年代から晩年まで、森は藤島と一緒に平泉の仕事に関わった。1972年から1978年にかけては、観自在王院遺跡の復元と環境整備をおこなった。その時の整備専門委員会会長は藤島亥治郎、工事設計監理者は森、そして工事施工者は京都の徳村造園（徳村五三郎）であった。

その後、1980年から毛越寺庭園の発掘調査が始まった。第1次は小規模で、調査委員は森と二人の造園技能士（山中功・徳村盛市）だけで、期間はわずか9日であった。最初の目的は汀線を保護するだけであったが、調査の結果によって庭園の遺構が比較的良好な状態で残っているということがあきらかになったため、調査範囲を庭園全体に広げ、その上で復元・整備もおこなう必要があることが確認された。結局、発掘調査は1991年の第13次まで続き、整備報告書も同年8月に発行された。森は1988年12月に亡くなるまで復元・整備の指導を担当した。

毛越寺庭園の遣水 さて、森と遣水の復元・整備事業に焦点をあてよう。毛越寺庭園の発掘調査の中で、もっとも顕著な発見は、円隆寺跡（大金堂）の北東に流れる遣水の跡であったと言える。『作庭記』に記載されている配置や構成とも一致し、日本に残る数少ない平安時代の遣水として脚光を浴びた。1983年（第4次）に遣水の落ち口が発見され、1985年（第6次）の際に「水源を除き、ほぼ完全に当初の姿のまま埋もれていた遣水の全貌を明らかにすることができた。」⁶⁾翌年の八百年大祭での「曲水の宴」のため、長さ80mもある遣水は発掘された遺構を露出展示する形で整備された。工事は、当時庭園文化研究所の所長となった森と京都の徳村造園によって実施された。

引き続き、1987年（第9次）に遣水の水源の発掘調査

がおこなわれた。しかし、以前に発掘された平坦部が「ほぼ完全に当初の姿のまま」に残っていたのに対し、水源の「斜面部に関しては、玉石と景石がほとんど抜け落ちていた」⁷⁾。結局、水源の滝石組みは発掘された状態で整備するのは難しく、「原位置を保っていない景石については、同規模のものを抜き取り穴に戻した。」また、「数個の景石が足りなかったので、補填し」⁷⁾たという。要するに、この部分だけはいわゆる「推定復元」によって整備された。遺構にあわせて整備をしたのだろうが、新しい石を選択したり、またその角度や周りとのバランス、斜面の角度を決めたりすることなど、新規作庭に近い行為であった。この時の整備を「作庭」と考えるならば、これは森の最後の創作になる。とにかく、今毛越寺庭園に見える遣水は森の長年の研究の集大成であると同時に、一つの「作品」であるとも言えよう。

おわりに これまで見てきたように、森は毛越寺庭園の歴史を考える上でのキーパーソンである。発掘調査をおこなっただけではなく、1987年まで復元・整備も指導したので、現在の毛越寺庭園の姿に大きな影響を与えたと言える。毛越寺庭園は森の歴史的研究の対象でありながら、作庭家としての腕を見せる場でもあったのである。森はそこに平安時代の庭園の美を追求し、また自分なりに解釈した平安時代の美意識を表現した。

以上のように、森の再評価を試みる上では、研究者としてももちろん、作庭家としての業績も見逃してはいけないということがあきらかになった。今後は、森の歴史家としての業績と作庭家としての業績とを照らし合わせながら、研究を進めていきたいと思う。

（マレス・エマニエル／客員研究員）

註

- 1) 森蘊「設計のための庭園史研究」『体系農業百科典〈第7巻〉造園』農政調査委員会、1967。
- 2) 森蘊『日本庭園史話』日本放送出版協会、1981、74頁。
- 3) 森蘊『庭ひとすじ』學生社、1973、28頁。
- 4) 森蘊「設計のための庭園史研究」前掲。
- 5) 藤島亥治郎編『平泉・毛越寺と観自在王院の研究』東京大学出版会、1961。
- 6) 平泉町教育委員会編『特別名勝毛越寺庭園発掘調査報告書（第6次）』1985、9頁。
- 7) 平泉町教育委員会編『特別史跡毛越寺境内 特別名勝毛越寺庭園整備報告書』1991、73頁。